

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00314

研究課題名（和文）戦中戦後期農民文学の展開と変容の研究 アイルランド文学と東アジアとの関係を軸に

研究課題名（英文）A Study of the Development and Transformation of Peasant Literature in Modern Japan: The Relationship between Irish Literature and East Asia

研究代表者

鈴木 暁世（AKIYO, SUZUKI）

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・准教授

研究者番号：60432530

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の農民文学におけるアイルランド文学の役割や農村表象の特色を探求し、ナショナリズムと文学の関係を調査した。アイルランド文学は、近代日本で広く「ケルト」文学としても認知されたが、その背景には人種や民族に基づく文学史の議論が影響していた。また、アングロ・アイリッシュ文学は、戦中期に反「英」的文学として注目され、日本の総動員体制下で国策文学の文脈で読み変えられた。この研究は、日本の作家たちが民族や国家、戦争といった問題にどのように応答してきたかを、ケルト文化の受容と変容を通じて検証した。それにより、日本文学研究のみならず日本英学史研究に新たな枠組みを提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本近代におけるアイルランド文学とそこから派生したケルト概念の受容と変容に焦点を当て、日本近代文学の特徴と問題点を探求した。大英帝国の植民地の民衆をアイルランド「国民」へと変えることを目指した自治独立運動とアイルランド文芸復興運動は、戦時中および戦後の日本において、「国家」としての日本、民衆、そして文学の関係を考える上で、重要な参考事例として常に異なる視点から注目されてきた。日本におけるアイルランド文学の受容と変容を検討することは、日本の作家たちが戦中および戦後に民族、国家、戦争という重大な問題にどのように取り組んできたかを明らかにする手がかりを示している。

研究成果の概要（英文）：This study delves into the significance of Irish literature within the realm of Japanese peasant literature, scrutinizing the intricate relationship between nationalism and literary representation. Despite originating from Ireland, Irish literature found widespread acceptance in modern Japan under the umbrella of "Celtic" literature, propelled by ongoing discussions within literary historiography centered on race and ethnicity. Additionally, Anglo-Irish literature emerged as a focal point of opposition against English cultural dominance during the wartime period. Through an examination of how Japanese writers engaged with issues of ethnicity, nationhood, and war, this research unveils nuanced insights, offering a fresh perspective that extends beyond the realms of Japanese and English literary studies.

研究分野：日本文学

キーワード：日本近代文学 比較文学 演劇 民衆 ナショナリズム ノスタルジー アイルランド プロパガンダ

## 1. 研究開始当初の背景

日本近代文学におけるアイルランド文学の受容と相互交渉の解明に取り組んできたなかで、日本においてアイルランド文学が、農村/都市、植民地/内地、方言/標準語、朝鮮語/日本語という問題に関わってきた上で重要である点が明らかになってきた。

農民文学運動は、「各国農民文芸を研究」することで、日本における農民文学を形成することを目的とする「新運動」を標榜し、朝鮮や台湾にも農民文芸会等の支部を持ち、相互影響関係を持ちながら展開した(『農民文芸十六講』1926)。従って、農民文学を研究する際には、各国文学及び東アジアとの影響関係を検討することが必須である。近年、戦時下農村における演劇の役割(畑中小百合 2008)、プロレタリア文学作家同盟と『農民』派との理論的角逐(内藤由直 2009)、和田傳らの作品論による農民文学研究(椋棒哲也 2013)、木下順二の戯曲と戦後社会運動との関わり(井上理恵 2014)等、同時代思潮との関わりを見据えた農民文学研究の優れた成果がある。しかし農民文学運動において海外文学や思潮が果たした役割については、プロレタリア文学との関連を検討する視点からの研究に重点が置かれている。

このことから、本研究は、明治から昭和初期にはアイルランド自治・独立運動への関心によって翻訳・紹介が盛んに行われたアイルランド文学が、戦中期には国策としての農民文学の理論と実践に組み込まれた一方、戦後には日本やアジア諸国の民族主義や在日米軍基地反対闘争、沖縄独立、民話劇、戯曲と方言を考える手がかりとして翻訳・研究・上演されたことに着目し、政治・社会と関わり合おうとする日本文学の問題を問うことが可能なのではないかと問題提起から着想した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、昭和期におけるアイルランド文学の受容に着目することで、ナショナリズムと文学、「民族」に関わる日本近代文学の特色と問題点を明らかにすることがある。大英帝国植民地の民衆をアイルランド「国民」化することを目指す独立運動とアイルランド文芸復興運動は、日本近代において、日本という「国家」と民衆と文学との関わりを考える上で、重要な参考例として異なる角度から絶えず光を当てられてきた。そのことは、日本におけるアイルランド文学の受容と変容を考察することで、日本の作家たちが民族、国家、戦争という大きな問題に、どのように取り組んできたのかを明らかにすることに繋がるであろう。本研究によって、日本近代文学と政治、国家、民族との結び付きの特異性を浮きぼりに出来るだろう。

農民文学は西洋の農民文学を翻訳・紹介することで展開し、特にアイルランドの文学は土地に根差す農民文学の手本とされた。本国では民族独立運動と結びついたアイルランド文学は、戦時下日本において国策化した農民文学に組み込まれる。しかし、戦後では木下順二らによって、戯曲における民衆の方言使用、民話劇、沖縄の独立、在日米軍基地問題、アジア諸国の民族運動を題材とする戯曲創作のための新たな視点からアイルランド劇の翻訳研究が進められた。

本研究では、土地、国家、民族を問題とする際に、戦中戦後を通して重要な参照項であったアイルランド文学の受容と変容を手がかりに、日本近代文学の特色を明らかにすることを目指した。

明治から大正期の日本において、大英帝国からの独立運動と共に盛り上がった植民地アイルランド文学運動が注目を集め、次第にアイルランドとイギリスの関係が、地方と東京、農村と都市、植民地と日本との関係に重ね合わされ、土地や国家、民族、帝国主義を考える際の重要例として参照・言及されていく。昭和初期からは、日本農民文学のモデルとしてアイルランド劇運動を捉え直す論考が、雑誌『農民』や中村星湖『農民劇場入門』に発表される。1938年には、農相有馬頼寧、中村星湖、島木健作、和田傳らにより農民文学懇話会が設立される。中村星湖が「文学、殊に農民文学を以て国策の線に結ぶ」(『農民文学の将来』1938)と述べたように、農民文学運動は国策と結びつき、農民に自己表現の機会を与えるという運動の当初の目的を掲げたまま、国策に沿った「健全」な文学や演劇によって民衆を「国民」として教化するための運動を推進した。農民文学運動の指針として目されたアイルランド文学は、総動員体制下における民衆の「国民」化をめぐる構築された文学の戦時的役割に関するナラティブの中へと組み入れられていく。本研究は、植民地アイルランドの民衆に土地と言葉と文化とを取り戻そうとした運動が、朝鮮や台湾では反帝国主義、民族独立運動と結びついたのだが、日本では体制へと組み入れられ、農民を「国民」化して総動員体制に組み入れる国民精神総動員を支えるものとなったことを明らかにすることを目的とする。

さらに興味深いことに、戦後農民文学に関わった木下順二は、1955年のインドのアジア諸国会議へ参加し、さらに「中国やソヴィエトや北朝鮮で、民族芸術のあり方を考え」た結果「シング病」に罹り、『谷の蔭』『アラン島』を翻訳、アイルランドを訪れて評論集『ドラマの世界』(1959)を刊行した。彼は、「普遍的方言」(『夕鶴』のせりふ)1956)を用いて農民を描き出す技法を獲得する際にシング戯曲を参考にしたと述べる一方で、自作戯曲「三年寝太郎」も「基地反対闘争」

も、「一種の抵抗運動」であり「独立の獲得」(木下 1956)であると論じ、「アイルランドの民族独立運動」は「今の日本の私たちに相当正確に感じられる」(1959)と述べている。戦後農民文学において、第二次世界大戦後のアジアの「民族運動の問題と民話の解釈や民話劇の創作」(木下順二 1956)を考える際の手掛かりとして、アイルランド文学が新たな文脈で重要視されていたのである。戦時下の国策との結びつき、戦後の「民族運動」や民話劇の創作、在日米軍基地反対闘争、沖縄の独立など同時代の民衆や農民の置かれている状況と抜き差しならぬ関係を結びながら展開した農民文学の展開を再検討し、東アジア諸国文学との相互影響と比較することで、文学と政治の結びつきから見た日本農民文学の問題点を明らかにすることができるだろう。

### 3. 研究の方法

本研究では、主に以下のような方法によって研究を進めた。なお、本研究の研究期間は新型コロナウィルス COVID-19 の世界的パンデミックと重なったため、当初予定していた海外での調査を行うことが難しくなった。そのため、研究を国内でも可能な方向に大幅に変更し、アイルランドと日本の関わりに焦点を絞るという方向転換を行ったことを記しておきたい。

- 1) 農民文学における翻訳・紹介と創作の連関  
戦中における国策への接近と戦後における戦争協力への反省と文学が果たす社会的役割の追求を軸にして海外文学と創作との連関を検討し、申請者が既に論じてきた昭和初期の農民文学運動や西條八十、菊池寛、坪内逍遙の例と比較した。
- 2) 日本農民文学運動をめぐるアイルランド-日本の相互交渉の実証的解明  
戦中戦後におけるアイルランド文学の読みかえと東アジア諸国との関係の変化に焦点を当て、台湾での現地視察・調査及び連携研究者とのシンポジウムを開催した。現地調査及び専門家との意見交換により、日本におけるアイルランド文学の翻訳・紹介資料を周辺状況も含めて広範に調査し、国際的相互影響関係と日本農民文学の特色を実証的に明らかにした。
- 3) 実践としての農民劇及び農民劇場の調査  
福岡県「嫩葉会」、山梨文芸会等の調査及びそれら農民劇を支えた理論に関する研究を行い、農民劇の実践と理論の関係を検討した。
- 4) 戦中期の反「英」文学としてのアングロ・アイリッシュ文学  
アイルランド農民文学とアングロ・アイリッシュ文学の関係についての資料を整理し、1930年代後半から40年代前半において「アイルランド文芸復興運動」が、地方劇運動の指針として目されることに加え、総動員体制下における民衆の国民化をめぐる構築された文学の戦時的役割に関するナラティブに組み入れられていった経緯と要因とを検証した。
- 5) 近代日本におけるケルト・イメージの生成・流通とナショナリズム  
日本の総動員体制下の農民文学(運動)における民衆の「国民」化をめぐる構築された文学の戦時的役割に関するナラティブにおいて、アングロ・アイリッシュ文学が組み入れられていった要因についての研究を進めるなかで、特に、日本の戦中戦後においてアイルランド及びその文学(運動)が、「国家」と「民族」との関わりを考える上で絶えず光を当てられてきたことを通時的に明らかにした。

### 4. 研究成果

研究成果の概要は、主に以下の4点に集約できる。

- (1) 昭和期農民文学運動におけるアイルランド文学の受容と読み替え  
昭和期における日本の農民文学運動について、特に戦中期の日本においてアイルランド文学がどのように受容されたのかという点を中心に研究を進めた。さらに、日本における受容を、台湾、朝鮮半島におけるアイルランド文学の受容史や農民文学運動と比較することによってアイルランド文学の東アジアにおける受容と相互交渉とを立体的に明らかにしようとした。研究実績の概要は以下の3点に集約される。
1. 台湾・国立政治大学台湾文学研究所における国際シンポジウム「從帝國到冷戰的文化越境與生成」において、研究発表「戦争時期日本的「葉慈」愛爾蘭文學的接受與民族主義」を行い、日本におけるアイルランド文学の受容がいかにナショナリズムと結びついていたのかという点を明らかにした。研究成果を論文として日本語および中国語で発表した。その際、台湾、朝鮮半島における農民文学運動におけるアイルランド文学受容について専門家と議論を行い、新たな視点を得た。
2. 上記の成果を受け、国立台湾大学において旧台湾帝国大学時代の雑誌を調査し、台湾におけるアイルランド文学受容及び農民文学受容の関わりを示す資料を収集した。
3. 日本文学とアイルランド文学、英語文学との相互交渉、文学とプロパガンダの関わりに関する研究を進め以下を含む研究成果を公表した。「郡虎彦「義朝記」成立の背景—演劇、プロパガンダ、女性参政権運動—」(有島武郎研究会第63回全国大会シンポジウム)、「郡虎彦『道成寺』について」(東アジア古典演劇研究会第8回公開講演会)、「日本文学史と「ケルト」」(第38回日本ケルト学会研究大会フォーラム・オン)、「英国に残る資料を通して戯曲について考える 郡虎彦のケースを中心に」(「近代文学研究」を資料から考える勉強会Ⅱ)、「芥川龍之介が編んだ英語副読本」(芥川龍之介シンポジウム)共著『怪異とミステリ』

(青弓社、2022)等を刊行した。

## (2)日本近代文学をめぐるアイルランド-日本-東アジアの相互交渉の実証的解明

日本におけるアイルランド文学・英語圏文学の読みかえ及び相互交渉と東アジア諸国との関係の変化に焦点をあてて研究を推進した。日本の戦中期におけるアイルランド文学の翻訳・紹介資料を周辺状況も含めて広範に調査し、文学における国際的相互影響関係とプロパガンダや外交との関わりについて国際学会で発表し、論文を執筆した。その概要は以下に集約される。

1. 国際比較文学会 (The 22nd General Congress of International Comparative Literature Association(ICLA))における「翻訳行為のポリティクス」セッションにおいて、研究発表「Overseas Performance of Japanese Drama and Propaganda」を行った。
2. *Ireland-Japan Connections and Crossings* (Cork University Press, Atrium, 2022)所収の「The reception of Irish literature and the image of Celts in modern Japan」において、日本における「ケルト」概念の受容と変容を分析することで、文学における異文化表象の問題点を浮き彫りにすると共に日本におけるアイルランド文学の受容とナショナリズムとの関連を追求した。本研究の成果は後述の(4)で継続した。
3. 日本文学とアイルランド文学、英語文学との相互交渉、文学とプロパガンダの関わりに関する研究を進めた。阪大比較文学会との共催でシンポジウム「戦中戦後東アジアの文芸空間の諸相をめぐって」等を開催し、口頭発表「ナショナリズムとノスタルジー——戦後日本における「ケルト」受容再考」(2023年1月)を行った。
4. 学術論文「郡虎彦「義朝記」(The Toils of Yoshitomo)成立の背景—演劇、プロパガンダ、女性参政権運動—」(『日本文学』2019年11月)を執筆した。

## (3)戦中期の反「英」文学としてのアングロ・アイリッシュ文学

アイルランド農民文学とアングロ・アイリッシュ文学の関係については、1930年代後半から40年代前半において「アイルランド文芸復興運動」が、地方劇運動の指針として目されることに加え、総動員体制下における民衆の国民化をめぐる構築された文学の戦時的役割に関するナラティブに組み入れられていった経緯と要因を検証した。その結果、イエイツが帝国日本のナショナリズムと日本回帰論の文脈で語られ、アイルランド文学史を学ぶことは「日本人の文学奉公の一助」となるという言説が出現するなど、総動員体制下の日本においてアングロ・アイリッシュ文学が文学の国策への奉仕へと接続されるという擦りが見られることを明らかにした。これらの議論を通して、アングロ・アイリッシュ文学が、太平洋戦争中に反英的性格を持つ「英語文学」として認識・享受されていたという特異な様相をうきぼりにし、イギリス・アメリカ文学中心の従来の日本英学史研究への新たな枠組を提示した。主な研究実績は以下の通りである。

1. 学術論文「戦間・戦時期日本におけるアイルランド文学の受容とナショナリズム 農民文学運動とW.B.イエイツ表象の変容」(2020)。
2. 研究会の立ち上げとシンポジウム開催：日本文学、英文学、比較文学、美学等の関連領域研究者6名と「近代日本文化とアイルランド研究会」を立ち上げ研究会を実施、シンポジウム「越境する美術、変容する文化」を開催した。
3. 研究発表：「戦時下日本の国策とアイルランド文学 —「英学史」の再検討に向けて—」(2021)、「Women's Suffrage Movement or Japanese Propaganda? Performance of Japanese Drama in Early 20th Century Britain」(2021)、「アイルランドと近代日本文学」(2021)等の研究発表を行った。

## (4)近代日本におけるケルト・イメージの生成・流通とナショナリズム

日本の総動員体制下の農民文学(運動)における民衆の「国民」化をめぐる構築された文学の戦時的役割に関するナラティブにおいて、アングロ・アイリッシュ文学が組み入れられていった要因についての研究を進めるなかで、特に、日本の戦中戦後においてアイルランド及びその文学(運動)が、「国家」と「民族」との関わりを考える上で絶えず光を当てられてきたことが明らかとなった。

近代日本では、アイルランドの文学がケルトの文学として盛んに受容された。1910年代には「愛蘭のみならず広くケルト種族文明を研究する」ことを目的とした研究会が結成され、「ケルト」への着目が始まる。近代日本の文学者たちが「ケルト」に関心を持った理由はどこに求められるのだろうか。近代日本におけるケルト・イメージの生成とその流過程を検証し、イポリット・テーヌ、アーネスト・ルナン、マシュー・アーノルドらによる「人種論」の受容を背景として人種や民族という要素によって文学作品を語る言説が流布していたことを明らかにした。それは、いかに「日本文学史」を語るのかという問題と関わりあっている。「ケルト」及び「ケルト民族」の表象に着目することで、日本の作家たちが戦前から戦後において、民族、国家、戦争という問題にどのように取り組んできたのかを検証した。農村表象に着目してアイルランド文学の日本における受容とその意味付けの変容を検討することで、戦中戦後期の日本文学におけるナショナリズムの様相を検討した。研究実績は概ね以下の点に集約される。

1. 明治期から現代に至る日本におけるアイルランド文学の翻訳・受容の様相を通時的に検討し、アイルランドの文化とそれと関わって論じられた「ケルト」という概念が、日本文化とそれを生み出す日本人の特殊性を主張する媒介物として用いられた日本=ケルト類似論を検討した。そして、そのように想像/創造されたドメスティックな「ケルト」イメージが、固定

化、継承、流布というプロセスを辿って、日本における農村・農民像、地方表象、ノスタルジーと結び付けられ、ケルトのステレオタイプを形成した経緯を分析し、研究成果を共著書『ケルト学の現在』(2024.3)にまとめた。

2. 前項の研究を基に、戦後にジョン・ミリントン・シングラアイルランドの戯曲を翻訳し、紀行文や演劇論を執筆した木下順二の演劇論や戯曲作品に着目し、戯曲『東の国にて』(1959)等を検討することにより、戦後日本におけるアイルランド文学の受容を、貫戦期的視点から考察した。この成果は、日本文学、英文学、比較文学、美学等の関連領域研究者7名との「近代日本文化とアイルランド研究会」におけるシンポジウム「故郷と異郷をめぐる比較文学」で発表した。
3. 前二項を基に、広く近代日本における英語文学の受容について研究した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 鈴木暁世	4. 巻 54
2. 論文標題 戦間・戦時日本におけるアイルランド文学の受容とナショナリズム：農民文学運動とW.B. イェイツ表象の変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 待兼山論叢	6. 最初と最後の頁 33-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鈴木暁世	4. 巻 68
2. 論文標題 郡虎彦「義朝記」（The Toils of Yoshitomo）成立の背景 演劇、プロパガンダ、女性参政権運動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 2-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鈴木暁世	4. 巻 59
2. 論文標題 Carrie J. Preston, Learning to Kneel: Noh, Modernism, and Journeys in Teaching（書評）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本研究	6. 最初と最後の頁 149-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鈴木暁世	4. 巻 8
2. 論文標題 複数の手で言葉に触れる 岡井隆・関口涼子『注解するもの、翻訳するもの』を読む	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 112-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木暁世	4. 巻 50
2. 論文標題 戦間・戦時期の日本におけるイエイツ表象	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 イエイツ研究	6. 最初と最後の頁 38,40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木暁世	4. 巻 1
2. 論文標題 「戦争時期日本の「葉慈」- 愛爾蘭文學的接受與民族主義」(「戦時日本における「イエイツ」 アイランド文学受容とナショナリズム」)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 從帝國到冷戰的文化越境與生成	6. 最初と最後の頁 20, 35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 鈴木暁世	4. 巻 24(3)
2. 論文標題 日本近代文学とケルト(5)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本ケルト学会会報	6. 最初と最後の頁 2,2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件(うち招待講演 4件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 鈴木暁世
2. 発表標題 ナショナリズムとノスタルジー——戦後日本における「ケルト」受容再考
3. 学会等名 大坂大学比較文学学会シンポジウム「戦中戦後東アジアの文芸空間の諸相をめぐって」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鈴木暁世
2. 発表標題 アイルランドと近代日本文学
3. 学会等名 日本アイルランド協会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木暁世
2. 発表標題 戦時下日本の国策とアイルランド文学 「英学史」の再検討に向けて
3. 学会等名 大阪大学比較文学会シンポジウム「越境する美術、変容する文化」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木暁世
2. 発表標題 Women's Suffrage Movement or Japanese Propaganda? Performance of Japanese Drama in Early 20th Century Britain
3. 学会等名 Global Japanese Studies Research Workshop
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木暁世
2. 発表標題 英国怪奇幻想ミステリと近代日本文学-A. ブラックウッドと芥川龍之介、西條八十を中心にー
3. 学会等名 怪異怪談研究会
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 Akiyo Suzuki
2. 発表標題 Overseas Performance of Japanese Drama and Propaganda -Focusing on performances of Japanese plays in Europe in the early 20th century-
3. 学会等名 The 22nd General Congress of International Comparative Literature Association(ICLA) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木暁世
2. 発表標題 郡虎彦「義朝記」(The Toils of Yoshitomo)成立の背景 演劇、プロパガンダ、女性参政権運動
3. 学会等名 有島武郎研究会第63回全国大会 シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木暁世
2. 発表標題 郡虎彦『道成寺』について
3. 学会等名 東アジア古典演劇研究会第8回公開講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木暁世
2. 発表標題 日本文学史と「ケルト」
3. 学会等名 第38回日本ケルト学会研究大会フォーラム・オン
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木暁世
2. 発表標題 英国に残る資料を通して戯曲について考える 郡虎彦のケースを中心に
3. 学会等名 「近代文学研究」を資料から考える勉強会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木暁世
2. 発表標題 芥川龍之介が編んだ英語副読本 The Modern Series of English Literatureとその周辺
3. 学会等名 北区文化振興財団設立30周年 田端文士村記念館開館25周年記念事業「芥川龍之介シンポジウム」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木暁世
2. 発表標題 戦争時期日本の「葉慈」- 愛爾蘭文學の接受與民族主義 (「戦時期日本における「イエイツ」 アイルランド文学受容とナショナリズム」)
3. 学会等名 国際シンポジウム「從帝國到冷戰的文化越境與生成」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木暁世
2. 発表標題 日本近代演劇とアイルランド
3. 学会等名 金沢大学人文学類シンポジウム「旅 と文学」
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Akiyo SUZUKI	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Cork University Press, Atrium	5. 総ページ数 520
3. 書名 Ireland-Japan Connections and Crossings	

1. 著者名 鈴木暁世	4. 発行年 2024年
2. 出版社 三元社	5. 総ページ数 543
3. 書名 ケルト学の現在	

1. 著者名 鈴木暁世	4. 発行年 2023年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 392
3. 書名 怪異とミステリ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------